

# 紙漉き

紙は古くからいろいろなものに使われ、われわれの生活と深いかかわりをもってきた。字を書き、絵を描き、物を包む紙、そして新聞・雑誌・教科書・ノート、さらに折紙・千代紙・和傘・提灯・扇・<sup>ふ</sup>紙・障子・襖…と数え上げたらきりがない。

しかし、この紙は、昔は大変に貴重なものだった。最近、平城京跡から発掘された膨大な木簡は、古代資料として注目されているが、紙とのかかわりから見ると、当時はまだ、紙が非常に貴重品で、紙の代りに木片を削って書いたということを物語っているように思えてならない。

## 1 紙漉きの歴史

これまで、105年中国の蔡倫が麻・樹皮・ぼろ布などを原料に紙を漉いたのが始まりとされてきたが、近年は、それ以前に紙はつくられていたといわれるようになった。

推古天皇18年(610)、高句麗の僧曇徴が紙漉きの技術をわが国に伝えたといわれ、聖徳太子の「法華経義疏」が紙の最古の遺品とされている。奈良時代には仏教の興隆につれて写経が広く行われるようになり、都では官営の製紙が行われ、紙の生産は各地に広まった。さらに、平安時代には都の紙屋院で製造されるとともに、各地に紙の特産地が現われ始める。

### 紙の種類

- 和紙 — コウゾ・ミツマタ・ガンピなどを使用
- 洋紙 — 和紙以外の紙。主に木材パルプを使用
- 板紙 — 包装用の厚手の紙で、ボール紙ともいう
- 合成紙 — 化学的につくられた紙

## 2 広島における紙漉き

広島地方における紙漉きは、資料も少なく、その起源を明らかにすることができないが、『延喜式』(927年完成)によると、税の一つの中男作物として紙を納めた国の中に安芸国の名前が見られるので、平安時代にはすでに紙漉きを行っていたものとみられる。



明治時代の紙卸売商の店頭

〔広島諸商仕入買物案内記〕(小谷進氏蔵)より

広島藩は、正保3年(1646)、「御紙方」を設けて、これまで自由にさせていたコウゾや紙の増産と統制に乗り出している。元禄16年(1703)には、藩営の紙漉場を設け、山県郡より紙漉工を招いて紙を漉かせ、宝永3年(1706)には三川町に「紙座」を開いて紙の専売制をしいている。さらに、享保ごろには紙屋株を定め、藩の紙蔵から放出された紙は持株商人によって販売されるようにしたという。

明治5年(1872)には、このような統制も廃止されて自由になり、明治の終わりには広島市内にも和紙や板紙をつくる工場も設けられている。

なお、旧広島藩主浅野長勲が東京に創設した有恒社で、明治7年、わが国最初の機械漉き洋紙の生産が始められたという。

### 3 和紙づくりの工程（「流漉き」の場合）

- ①白皮づくり 刈り取ったコウゾやミツマタを釜で蒸して皮を剥ぎ、さらに黒い表皮を包丁などで削り取る

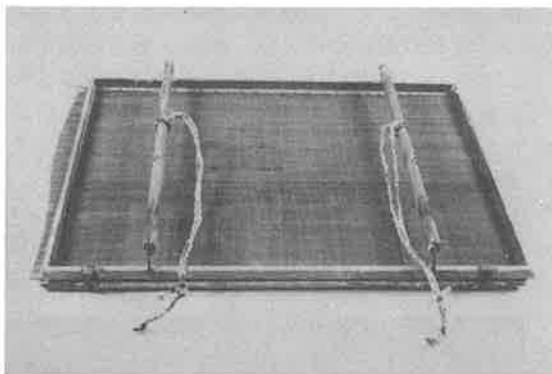


コウゾの皮

- ②川さらし 白皮を清流につけて洗い、日光に当てて漂白する

- ③煮熟 灰汁や石灰水で煮て不純物を溶かし、さらに水洗いしてきれいにする

- ④叩解 堅い木の棒で叩いて繊維をばらす



スとスキワク

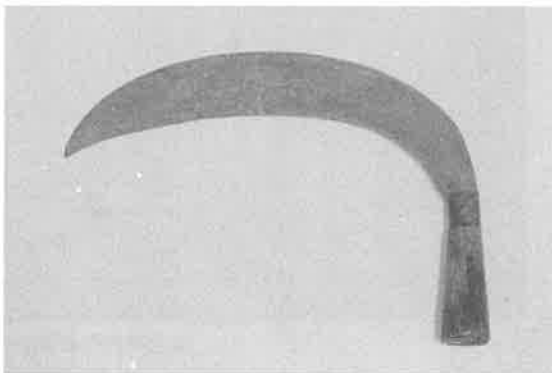
- ⑤漉き液づくり 叩いて綿屑のようなになった繊維とトロロアオイからとったノリをスキブネに入れて掻き混ぜる

- ⑥紙漉き スを張ったスキワクを、スキブネの中で前後に揺り動かして紙を漉く。スはずし平らな台の上にひっくり返して、スだけめくり取る

- ⑦水切り 漉きあげたぬれたままの紙を積み重ね、石の重しを置いて水気を搾る

- ⑧乾燥 1枚ずつ剥がして干し板にホシバケで張り付け、天日で乾かす

- ⑨仕上げ カミキリガマで裁断し、規定枚数ずつに包装する



カミキリガマ